〈非在〉のエティカ

ホモ・パティエンスの人間学のために

令和３年

小野　文生

（論文要旨）

「〈非在〉のエティカ――ホモ・パティエンスの人間学のために」と題された本研究は、〈非在〉のエティカの探究を通じて、「ホモ・パティエンス（homo patiens）＝受苦するひと」という人間理解に立った人間学を構想することを目的としている。

〈非在〉とは、「在る／無い」の単純な二項対立図式に収まらない「残りのもの」を思考するための概念であり、現れることのないまま、しかし〈「在るのではない」わけではない〉という仕方で、つねにすでにそこに存在しているものを指す。〈非在〉は、排除され、居場所を奪われがちな受苦的存在や受苦的できごとを名指すために要請されると同時に、他方でそれらが単なる表象や「承認のポリティクス」に還元されることを拒むような、それゆえ絶対的肯定性と否定性とを共に帯びた概念ならぬ概念である。したがって〈非在〉のエティカの探究は、その「存在の在り処／居場所／日常的慣習」としての「エートス」という語源に遡りながら、またコナトゥス（自己保存への努力）の再審と現代の生政治に対する批判的省察をともないながら、エティカの意味を根源的に問いなおす道をたどることになる。

さらにその省察の過程において、本研究は、人間の生や経験のはらむ本源的な「弱さ」「もろさ」「ままならなさ」を主題化し、そのパトス（受苦）的契機の教育学・人間形成論的な意義および人間学的な意義を論じる。と同時に、逆にそうしたパトスをめぐる思想の立場から、あらためて教育学・人間形成論と人間学の在り方を問いなおし、それをホモ・パティエンスの人間学として再定義・再編成することをこころみる。そのために、H・アーレント、E・レヴィナス、G・アガンベン、石牟礼道子、鶴見俊輔らの思想の検討や、教育哲学、臨床教育学における「パトス論的転回」の動向の検討をとおして、それらに一貫するホモ・パティエンスの思想の内実をあきらかにするとともに、それらの思想的可能性を〈かなしみの知〉と〈知のかなしみ〉の両義性をめぐる問題構制のうちに見出すことになる。

本論に入る前に、序章「ホモ・パティエンスの人間学――〈かなしみの知〉と〈知のかなしみ〉のほとりから」で、本研究の根本的関心の在り処、問題設

定、ホモ・パティエンス思想のアクチュアリティ、パトス概念の基本理解について説明をおこない、ホモ・パティエンス思想と〈パトスの知〉／〈臨床の知〉の展開、教育学・人間形成論との思想的交叉に関して、思想的・理論的地図を描く。また、本研究全体の構成と見取り図を、図表とともに示す。

以下、本研究の本論は3つの部門によって構成されている。

第Ⅰ部「〈非在〉の思想的水脈――人間的なるものの在り処」（第 1 章～第 4 章）では、主としてアーレント、レヴィナス、アガンベンの哲学をとりあげ、西欧近代、啓蒙、ショアー／ホロコースト、生政治をフィールドとし、(1)〈アウシュヴィッツ〉というできごとと受苦的経験、(2) 全体主義、啓蒙理性、科学技術の暴走、技術的合理性、(3) 現代の包摂的排除の生政治などを問題対象とする。また、(1)「人間的なるもの」の凋落後なおそれを希望することはいかにして可能かを考えること、(2)〈非在〉のエティカとは何かを哲学的に思考すること、(3) ホモ・パティエンスの思想を掘り起こすことを、共通の課題とする。

第 1 章「コモン・センスとしての応答的理性――アーレントにおけるパトスと人間のもろさをめぐる省察」では、アーレント思想の中心的主題をコモン・センス論のうちに見出し、それを啓蒙理性とは異なるもう一つの理性の探究として読み解く。一般に複数性、誕生性、現れ、ドクサといった概念で知られる彼女の思想は、その奥に、人間の「ままならなさ」や「もろさ」などパトス的契機への感性を宿している。『全体主義の起源』の人権のもろさ、『人間の条件』（＝『活動的生』）における赦しと約束、『政治の約束』における哲学の起源をめぐる議論などを紐解きながら、「パトスとともに生きる人間」の「条件」の形象をあきらかにする。

第 2 章「ただ生きること、あるいは〈非在〉の歓待――アガンベンにおける「剥き出しの生」をめぐる批判」では、アガンベンの「剥き出しの生」をめぐる生政治への批判を導きの糸としつつ、アリストテレス以来の「よく生きること」という政治的生の次元に「ただ生きること」がいかにして包摂されているのかを考察し、〈非在〉概念に基礎的イメージを与える。インファンティア、非の潜勢力、なんであれかまわないもの等の概念の検討を通じて、〈非在〉を「ある／ない」の単純な二項対立図式には収まらない「残りのもの」を思考するた

めの概念として提起する。その作業は、遺棄されてきたものたちと共に新たな共同性を編みなおすためのエティカの構想に接続される。

第 3 章「ホショウ科学時代のパテイ・マトス――アガンベンにおける経験の思想と〈非の潜勢力〉」では、経験概念の本質を「試練」「危機」「通過」などパトス的契機のうちに見出し、古代ギリシャ以来の伝統的な「パテイ・マトス（受苦をとおして学ぶこと）」という思想に光を当てる。アガンベンのモデルネに関する分析、パテイ・マトス思想の考察を紐解きつつ、「科学の主体（認識の増殖）」と「経験の主体（成熟の経験）」という区別のアクチュアリティを考察する。さらに、潜勢力（可能性／能力）をめぐるアリストテレス思想の特異な読解をもとに、「～ないことができる」という〈非の潜勢力〉のうちに――技術的合理性と機能主義のもとで経験のパトス的契機をむしばむ――ホショウ科学時代に対する批判的準拠を見いだす。

第 4 章「審問されるコナトゥス、エティカの行方――レヴィナスとアガンベンのスピノザ」では、レヴィナスとアガンベンのスピノザ「コナトゥス」概念の読解をとりあげ、「ただ生きること」という生存の力が倫理（エティカ）とむすびつく可能性を探究する。20 世紀が顕わにした市民社会の基盤を揺るがす重い問題（啓蒙の限界、全体主義、ナチズムなど）の根源的要因とスピノザの名前はしばしばむすびつけられてきた（アドルノやレヴィナスなど）。そうした批判の特徴をふまえ、アガンベンの特異なレヴィナス読解を跡づけながら、コナトゥスを、単なる自己保存の力の発露というよりは、むしろ「もろさ」や「ままならなさ」といったパトス的契機にみちた本源的に不安定な力として、それゆえ〈非在〉を迎え入れる倫理的な力として再定義することをこころみる。

つづく第 II 部「エティカの源泉――弱さとかなしみ」（第 5 章～第 9 章）では、日本の民衆思想に着目し、石牟礼道子と鶴見俊輔をとりあげる。日本近代、水俣病、戦争、棄民政策、市民の政治がフィールドとなり、（1）水俣病、戦争、ハンセン病などカタストロフィにおける受苦的経験、（2）技術的合理性、システムの純化の隘路、（3）生きることのかなしみ、寄る辺なさ、弱さ、身もだえの知が問題対象となる。また、（1）人類／人間であることの「罪」を見据えたうえで人間の再定義をはかること、（2）〈非在〉のエティカの生起する場所、弱さの倫理の可能性を描き出すこと、（3）弱さ、もろさ、ままならなさに即し

たパトスの知を構想することが、課題となる。

第5章「〈非在〉のエティカの生起する場所――石牟礼道子とパトスの記憶誌」では、カタストロフィの記憶に関する哲学を参照しつつ、石牟礼道子を中心とした水俣病をめぐる多様な言説や〈受難と再生〉の物語をとりあげる。日本の市民社会がかかえる構造的問題を具体的かつ批判的に論じると同時に、表題にあるように、本章の省察は「承認のポリティクス」には回収されない〈非在〉のエティカの生起する場所を切りひらくこころみである。また、「悶え加勢」、「赦し」、「当事者性」、「もうひとつのこの世」など、ホモ・パティエンス思想にかかわる問題群の可能性を示唆する。

第6章「悲しみの器と煩悩のケア――近づくことの不可能性と遠ざかることの不可能性について」では、不知火海の風土に息づく煩悩をめぐる日常表現を手がかりに、「煩悩のケア」という思想の可能性について論じる。「煩悩のケア」は、究極的にはよろこびとかなしみをともに包み込んだ生類の存在そのもの、いのちの連なりそのものへの根源的なケアを含む。ひとりの人間の苦悩を計る物差しはありえないというかなしみから出発する石牟礼の「悲しみの器」たる人間理解を媒介に、他者のかなしみへ「近づくことの不可能性」と対象から「遠ざかることの不可能性」との逆説的共存という事態から、ひとのかなしみに応答するパトスの知の在りようを探る。

第7章「〈ひずみの底の未来イメージ〉、あるいは弱さの倫理――鶴見俊輔のプラグマティズムと科学技術の政治性」では、戦後日本の市民社会論の源泉の一つとなった鶴見俊輔の思想と行動をそのプラグマティズム哲学から読み解き、それを日常性と自己の「ひずみ」から出発する「弱さの倫理」の探究として描き出す。無謬の真理に立とうとする科学や、合理性と「正しさ」を標榜する政治や社会システムが陥りうる落とし穴を回避するために、必要なことは何か。それは、「弱さ」を克服して「強さ」に反転させるのではなく、「ひずみ」（偏向・限界・欠点）をむしろ活かすような、パトスにみちた不断の遊動性の実現であることが示唆される。

第8章「「方法としてのアナキズム」考――鶴見俊輔におけるユートピアとしての漫画的精神」では、鶴見俊輔の大衆文化論のなかでもとりわけ重要な漫画論を対象に、その「漫画的精神」のうちに鶴見のユートピアを描く作法を読み

解くことで、彼の「方法としてのアナキズム」の内実をあきらかにする。鶴見の漫画論は、逸脱や異なる視点や「うすっぺらい」ものの意義・価値を語ると同時に、そうしたものを「イミタブル・パターン」として模倣するひとつの学習メディアとして漫画をとらえる視点を持つ。フランクフルト学派や竹内好の「掙扎（そうさつ）」との関連性を紐解きながら、日常のエートスにもとづいた〈身もだえの知〉の構想に、その可能性の中心を見いだす。

第 9 章「〈知のひと（ホモ・サピエンス）〉から〈受苦するひと（ホモ・パティエンス）〉へ――石牟礼道子と鶴見俊輔の出遭いから」では、第Ⅱ部の考察のまとめとして、石牟礼と鶴見の交流を描く。谷川雁を仲立ちとした最初の間接的な出遭い、『思想の科学』をきっかけに田中正造と林竹二を媒介にして生まれた直截的接触は、一方の石牟礼にとって決定的な出発点の一つとなった。他方、この出遭いから鶴見は、その後、日本近代の背負った「罪」を比類なき深さにおいて問う存在として、石牟礼を不世出の作家と認識するようになる。ふたりの思想の交錯地点に浮かびあがる主題が、〈非在〉をまなざす〈かなしみの知〉と〈知のかなしみ〉として規定される。

つづく第Ⅲ部「パトスの沃野へ――もろい部分にたつ思想の探究」（第 10 章～第 12 章）では、ホモ・パティエンスの人間学の具体的展開のフィールドとして、教育学・人間形成論、とりわけ教育哲学・臨床教育学の領域における理論や言説をとりあげる。問題対象となるのは、(1) 技術的合理性とパトスの知、(2) 教育学・人間形成論と機能主義、(3) ホモ・パティエンスの人間学である。また、(1) 技術的合理性／機能主義への対抗原理としてパトスの知の可能性を考察すること、(2) 臨床の知（哲学／教育学／フィールド学）の再検討をおこなうこと、(3) ホモ・パティエンスの人間学の具体的展開をはかることが、課題となる。

第 10 章「啓蒙批判の論理とパトス論の行方――教育学のパトス論的転回の文脈」では、「教育学のパトス論的転回」の「論理的文脈」をあきらかにする。「教育学のパトス論的転回」とは、教育学においてパトス的契機に価値を見いだし、現行の理論・実践の底流にある啓蒙理性にもとづく思想に変更を迫る立場である。とはいえ啓蒙理性は教育学と不可分の要素でもあるからには、その「批判」はけっして単純化できない。既存の「批判」の論理的タイプを「根源／生命論的」、「超克／弁証法的」、「撹乱／差延的」に分類したうえで、本研究のこころ

みを「非在／絶対的」として差異化し、その論理的文脈の見取り図を描く。

第 11 章「技術への問いとパトスへの問い――もろい部分にたつ教育哲学へ」では、教育と技術のかかわりをパトスの視点から批判的に再考し、システム化と脱システム化の解消しえない二重性を維持する「もろい部分にたつ」思想的原理から、教育哲学を構想する。教育哲学領域における近年の理論的達成とその系譜（蜂屋慶、矢野智司、今井康雄、田中毎実ら）を整理したうえで、そこに共通した「技術とパトス」への問題関心があることをあきらかにする。その理論が提起しているもろもろの示唆を踏まえ、「弱さ」や「もろさ」を含んだパトスの知によって教育・人間形成をめぐる知を再定義するための方向性を示唆する。

第 12 章「ひとりで在ることと共苦すること――パトスの知と臨床教育学」では、他者の悲哀や苦悩に寄り添うパトスの知が臨床教育学の思想的基底において果たす役割を、水俣病の受苦的経験から生み出された思索を手がかりに考察する。両者をつなぐ思考の導きの糸は、「ひとりで在ること」と「共苦すること」という主題である。臨床教育学の起点の一つとなった和田修二および M・J・ランゲフェルトの臨床教育思想を、「同行同苦」や「寄る辺なさ」の概念を手がかりに検討する。さらに、石牟礼道子や緒方正人らの切りひらいた地平から、他者の経験の共有可能性／不可能性、つながりなしにつながること、当事者性の動揺といった主題を考察し、論理矛盾や逆説にみちた経験そのものを考え抜こうとするパトスの知と臨床教育学の展開可能性を、多様な問題群とともに展望する。

以上、第Ⅰ部から第Ⅲ部までの考察を踏まえて、終章「〈非在〉のエティカ――ホモ・パティエンスの人間学のために」において、本研究全体をつらぬく主題であり、かつ今後さらに考察を展開していくべき論点を挙げて総括的省察をおこなう。あらためて、弱さの思想とは何かを論じ、共苦するパトスのひらく関係性について整理し、〈非在〉の多元的な位相を示唆したうえで、それらがコナトゥスと遊動性のエティカという観点においてむすびつくことを示す。そして最後に、ホモ・パティエンスの人間学とはいかなる学知であり、どのような「対象」と「方法」と「エートス（ものの見方）」に立つものなのかを論じて、この受苦する人間の「祈りの文法」を含む思想的構想のむすびとする。